



食事作りへの取り組み

【児童養護施設博愛社】

二〇二二年度は、第二博愛社、聖三一教会での地域小規模児童養護施設が開設されます。家庭的な生活を目指し、今年度から各ホームでの食事作りが少しずつスタートしてきました。

幼児ホームでは、朝昼晩の毎食を買い物から調理までを行い、学童ホームでも週2〜3回の買い物と調理が始まっています。今までの『厨房で作ってもらう』から『自分達で作る』という家庭に近い当たり前の生活へと変わってきています。

また、地域小規模グループでは食事作りは開設から実践していますが、その現在の取り組みを職員会議の中で、各担当者から報告会を行うことができました。子ども達が自立に向かって歩んでいくために、食事作りは生活を豊かにする大きな役割を担ってくれています。子ども達の「美味しい」の言葉を励みに、職員みんなで力を合わせて頑張っていきたいと思えます。

【勝原 駿】

地域小規模報告会



報告会での資料

大きな木のまわりでラジオ体操

コロナ禍で、外へ出る機会と他者と一緒に関わることが極端に少なくなってしまっていて1年以上。感染対策を行ったうえで何か心と身体に良いことはないかと知恵を出し合い、今年の夏は博愛社のグラウンドでラジオ体操をみんなで見ようということになりました。

7月20日から8月末までの平日の朝10時にグラウンドの木の周りに集合ということで、子ども達からお年寄りまでたくさんの人が集まりました。車いすの方は車いすに乗ったまま、それぞれが無理のない範囲で青空の下身体を動かしました。普段は大人しい方がかわいい子ども達の体操を見て大喜びされる姿もあり、あらためて世代間交流の良さを実感しました。

ラジオ体操といったら「スタンプカード」が付き物。昔を思い出して子ども達以上に年寄りの皆さんがスタンプカードを喜ばれ、肌身離さず持っておられる方もいました。

残念ながら、8月2日から再度「緊急事態宣言」が出されたため中止となってしまいましたが、来年こそは気兼ねなく交流が出来ますように祈ります。

【10年後の博愛社を考える会】



夏空の下でみんな一緒にラジオ体操



お年寄りは木陰で体操

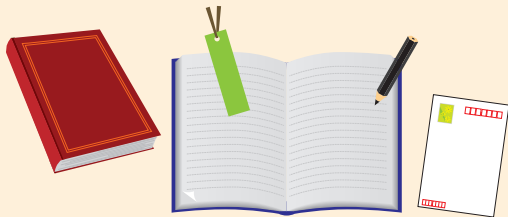
四季折々

スマート化と古き良きモノ

介護記録が電子化されました。iPadを使用しながら朝、夕の申し送りをしています。コロナ禍の影響もありますが、オンライン面会、ご家族との連絡はLINEでやり取りするようになってきました。スマートに時代は変化していますが、便利さに慣れてしまうと、それが当たり前になりがちです。そうなれば、通信が遅い、Wi-Fiが無い、既読がつかない、充電の減りが早い、ログイン出来ない等、電子化によってストレスを抱えてしまうのも事実です。

博愛の園ではご家族とハガキのやり取りされている入居者、毎日鉛筆で日記を書く入居者、図書の本を読んでおられる入居者がいらっしゃいます。1階にはダイヤル式の公衆電話があります。また、インターネットでの通販が当たり前になった今でも、十三商店街は活気に満ち溢れています。人やモノを介してではないと満たされない事もあります。古き良きモノは、消える事はありません。この先、便利さも取り入れつつ古き良きモノ（事）も継承できる柔軟な思考を持ち合わせたいと思う今日この頃です。

【特養博愛の園 相談員 坂本康一郎】



▽個人 1口 3千円
▽法人 1口 1万円
博愛社後援会会費
▽期間はずれも年会費で、
▽郵便振替口座番号 4月～翌年3月
092074676
▽口座名義 博愛社
社会福祉法人



笑顔で「きもちがいいごあいさつ」

毎月25日は「ニコニコの日」
「ごあいさつプロジェクト」
【博愛社こども園】

前回の「はくあい」でお知らせしていた『博愛社グランドデザイン2020』の実行委員会が6月に開催され、「コロナ過の中でも、何かできる取り組みはないか？」と話し合いました。そこで『明るいは笑顔があふれる博愛社』は『はくあい』プロジェクトに取り組みむこととなり、「毎

月25日はニコニコの日☺」が決まりました。保育・教育の中でも「挨拶」は大切にしていくこと、挨拶「は一人ひとりと目を見て毎日していること」となると、決まった時は「とても良いプロジェクトだ」と思いました。

博愛社の各事業所でPRのポスターを作ることになり、クラスの子ども達に話をすると、わかりやすく取り組みやすい内容なので理解をし

て、ポスター作りを喜び「早く作りたい」と言っていました（笑）。私は3歳児そら組の担任で、取り組む前に「挨拶をする時のニコニコの自分の顔を描こう！」と伝えて、顔の形の画用紙を渡しました。すると、自分で目や口を描いたり、髪の毛を貼って「見て！できた！」「私のめっちゃ可愛い」と自画自賛だったり（笑）。「○○ちゃんも可愛いな」と友達の作品も褒

めていた子ども達でした♪ 普段から挨拶をしつかりとしてくれる子ども達ですが、この作ったポスターが法人内に貼られているのを見たら、すごく喜んで、より挨拶に興味を持ち、法人内の方達との交流に繋がる：そんな笑顔いっぱいの子どもの姿が今から楽しみです♪

【米倉 充音】

「博愛社グランドデザイン2020」と書いた素敵な字は、こひつじ乳児保育園の和田先生が作って下さり、「ニコニコの日」のデザインはこども園の近藤先生が作りました。どちらも素敵なデザインで、どのポスターにもこの2つが貼っています。「法人内で取り組んでいる」ことも目で見て理解でき、とても良いプロジェクトだと、改めて感じました。法人内のプロジェクトに携われて、私自身嬉しく思いました。

コロナ禍の園行事
ぱんだぐみフェスティバル
【こひつじ乳児保育園】

私たちは未だにコロナ禍の生活を余儀なくされています。どうしても安全に過ごせるのかと日々考え対策を行う中、昨年は行事を中止する事もありました。

コロナ禍の生活が続く中で、少しずつですが中止ではなく今できる形で行事を行えないかと考えました。

2歳児の卒園前のお別れ遠足は、例年だとバスで大きな公園へ出掛けていましたが、昨年は「ぱんだぐみフェスティバル」として大園庭で魚釣りやコイン落とし、綿菓子づくり等を子ども達と楽しみ、

コロナ禍でのキャンプ
【児童養護施設博愛社】

児童養護施設博愛社の夏の恒例行事に、社外で1、2泊過ごす夏季キャンプがあり、数多くある行事の中でも子ども達が一番楽しみにしている行事です。

今年のキャンプはコロナ禍

お弁当も食べました。園外に連れて行ってあげられず残念な思いもありましたが、子ども達の楽しそうな姿とたくさん笑顔に、そのような思いはなくなり当たり前に行っていた行事を見直す良い機会となりました。

りました。今後子ども達にとって良い経験、楽しい思い出となるよう行事を職員で考えていきたいと思えます。

【文野 陽子】



真剣な眼差しで魚釣り

で制約の多い生活を強いられる子ども達に、少しでも良い思い出を作りたいと思いを込めて、まん延防止等重点措置期間であれば、キャンプに行くことが認められ、事前に準備を進めていました。しかし、8月2日に緊急事態宣言が発令され、予定していたキャンプはほぼ中止。7月中にキャンプに行けたホーム

もあれば、8月に予定していたために中止せざるを得ないホームもありました。そして、夏のほとんどの行事が中止となり、施設長からの計らいで特別に予算を組んでもらい、花火を購入したり、社内でバーベキューを楽しんだりして、ささやかですが楽しい夏の思い出が作れました。

【梶川 靖夫】

安全運転への取り組み
【博愛社高齢者事業】

デイスーパーバスやショートステイなど、介護を必要とされるお年寄りの方を送迎する際にはほとんど車を利用していきます。また、入居されている方も、通院などの時には車は欠かせません。その分、交通事故のリスクは高くなり、常に気を引き締めて安全運転に徹する必要があります。

しかし先日、地域の方から「ちゃんと安全運転が出来ておらず怖い思いをした」との連絡が入り、あらためて安全運転の研修等を行いました。実際のドライブレコーダーに写っていた場面を見て具体的に

にどうすべきかを記入し、また安全運転の検査で自らの運転を分析してもらい、個々の注意点を認識しました。

また、博愛社の敷地内は子ども達が飛び出してしまうことがあるかわからないので、敷地内の制限速度を10キロとし、高齢者事業としての安全運転ルールを定めました。交通事故からは不幸な事しか生まれません。ハンドルを握る際には、ゆとりをもつてより一層の安全運転を心がけてまいります。

【川田 誠】



車のキーの近くに
 掲示して確認



夏の思い出たち

「昔懐かし 博愛社診療所」

【サテライト特養清心館】

清心館入居者の片岡さんが最近、昔（約70年前）の博愛社診療所の写真を見られ、写真に写っている橋本節先生のことを懐かしそうに話してくださいました。当時の診療所は地域の人達もたくさん利用され、先生は診療時間や診察料は二の次で、目の前の困っている患者さんを献身的に診

察され、地域の人たちからの信頼も厚かったとのこと。また、誰に対しても歯に衣着せぬ物言い、子ども達からは「怖い、厳しい」との印象で、片岡さん自身も「先生の前立つと緊張のあまり自然と背筋がピン！」と伸びて姿勢が良くなっていました」と懐かしそうに笑顔でおっしゃっ

ておられました。他の入居者さんにも橋本先生に診ていただいたという方がおられます。博愛社診療所での懐かしい記憶と博愛社での生活に、深いご縁を感じる今日この頃でした。

【宇野 豊】



橋本先生を懐かしむ片岡さん

博愛社の草創期にあって、重要な人物の一人に村尾よしという女性がいますが、余り知られていない。以前、大月英雄氏が「交友手牋」という資料にある彼女の書簡を分析し「設立期の博愛社を支えた人びと」（『科研成果報告』平成二六）という論文を発表している。

過日『博愛の園』を紐解いていたとき、小橋実之助の筆になる「村尾技芸女学校を觀る」（二〇一〇号、一九一九年一月）や彼女が亡くなった時の「村尾女史を惜む」（二二二二号（一九二一年一月）の論文にふと目が止まった。実之助は彼女が博愛社創設時、勝之助が抱懐していた実業教育の理想を「十二分に頭脳に注

入され」体得したと表現している。村尾は勝之助死後、博愛社を退社し、一九〇二（明治三五年）故郷高田村に「村尾裁縫女学校」（現、県立上郡高等学校）を創設する。学校は郡費の補助を受け順調に発展していき郡役所も彼女に「功績状」を贈呈した。そして一〇

更し、補習科を新設し村尾技芸女学校と改名し、一九一六年に寄宿舎も設けた。当時の生徒は一一〇余名、創立以来の入学者七〇〇名、卒業生三〇〇名にのぼるとされている。入学資格は高等小学校卒業程度で、卒業年限が三ヶ年、

当時の女子実業的教育の趣旨を体現しており、実之助は勝之助の「実業教育の趣旨を能く徹底体得し以て我社の分身として終始教育の方針を一貫して居る」（二〇一〇号）からであると指摘する。そして実之助は「村尾女史を始め関係職員諸氏の一層献身的努力に依り、年と共に

を千祈万禱して已まないものである」（二〇一〇号）と。実之助は博愛社関係の人が別の場所と機会を利用して多くの女性たちを育て、新しい事業を展開していることに感謝している。

博愛社の歴史探検 [34] 「黄鳥の幽谷より出で、喬木に遷る」―村尾よしの事業

（明治四三年）上郡町の有志の協賛助力によって同町に移転する。

教育内容は裁縫技芸を柱に、加えて普通学即ち修身道德の要旨、読書、綴方ならびに数学、理科、体操、唱歌等であった。勝之助から体得した理想的教育が具現化された。

し唯机上の空疎なる議論に趨かずして内は家庭に在り、外は実社会の上に立ちて実際に活用し得らるゝ有為の女子を養成するに尽瘁されん事を希望すると同時に神の特別なる恩寵の同校の上に加はらん事

しかし残念ながら村尾は一九二一（大正一〇）年九月九日、四八歳で天に召された。「女史の如き有為の士を失ふ教育界のために洵に惜むべきことなり」と追悼号の末尾に記している。勝之助が博愛社に抱懐していた思想が直接かつ間接的にも具現化されたケースである。かかる点も博愛社史から学べる貴重な財産である。

追悼文で「黄鳥の幽谷より出で、喬木に遷るが如き有様」と称し、努力が報われた喜びを表す。移転に伴い、学則を変

すなわち村尾の事業には、

望する

室田 保夫 関西学院大学名誉教授